



駒林小 学校便り

令和2年度
2月号
1月29日発行

その先へ

副校長 佐藤 勝也

早いものでもう2月。あと少しで令和2年度も終わる時期となりました。駒林小の子どもたちは、日々学習のまともに一生懸命取り組んでいます。

感染症予防対策により、学校行事や学習活動がすべて例年どおりには行われなかったこの1年ですが、本校の児童はその状況を自分たちなりに理解し、教職員と協力してとてもよく頑張っていたことを大変嬉しく思います。これも、本校の教育活動に変わらぬご理解とご協力をいただいている保護者の皆様、地域の皆様のお力添えのおかげであると感じています。本当にありがとうございました。

さる1月8日(金)には、神奈川県を含む1都3県に2度目の緊急事態宣言が発出されました。昨年度のとくとは様々な状況が違っているかと思いますが、今回は今回としての発出された意味についての理解を十分に深め、より安全・安心な学校を目指し、小さな改善であってもその積み重ねを大切にしていきたいと考えています。

さて、先日ちょっとしたきっかけから「花の終わりの言い方」をいろいろ調べてみました。日本人は「意志、思想、感情など”形のないもの”を伝えるために、昔からさまざまな言い回しや表現を作り出してきましたが、とても美しさを感じるものもあります。

桜 散る	菊/紅葉 舞う	梅/沈丁花/萩 こぼれる
牡丹/芍薬 崩れる	椿 落ちる	朝顔/菖蒲 しぼむ
蓮 沈む	雪柳 吹雪く	百合 しおれる

皆様にとってもおそらく耳にしたことのあるこれらの表現は、「(たとえば、ウサギやカニを数えるときに単位として使用する”兎(と)”や”杯(はい)”等のような日本語のきまり」というものではなく、古い短歌や俳句、詩などの中で用いられている表現を紹介したものです。同じ花でも様々な表現が用いられているので、どれを採用するかはその人の感覚ということのようです。そしてその中で、とても私の気を引いたのが、以下の表現でした。

紫陽花 しがみつく

たしかに、紫陽花の”花”(正しくは”がく”でしょうか)は、茶色く枯れたまま落ちずにずっとそのまま残っています。こんな表現に目を止めてしまうのは、昨今の社会情勢だからでしょう、ずっともとのまま美しくありたいと願う…とても人間らしさを感じてしまいます。

世の中は移り変わっていくもの。その一方で、コロナ以前のありふれた日常の幸せを取り戻したいと誰もが願っていることでしょう。しかし、子どもたちの時代には、その願いを活力としつつも、おそらく現在とは違う生活様式が切り拓かれ、従来にはなかった新しい希望に満ちた未来が待っているのではないかと、そんなふうに思います。様々な新しい価値観の錯綜するなか、子どもたちの一人ひとりが、自分にとっての進むべき道をしっかりと考え、取捨選択しながら前に進む。そして、実り豊かな人生へとたどり着く。そのことを心より願ってやみません。今年の学びは、ずっと、その先へと続いています。

今後とも、本校の教育活動に変わらぬご理解ご協力をお願いいたします。